

くつなぐ教室コラム> 「学び・遊び・つなぐ」プロジェクト —フリースクールができること—

間屋口貴仁

1 はじめに

この度は、未来の学校の先生たちの前で話をさせていただき機会をいただき心より感謝申し上げます。20年余り不登校の子ども達の支援をさせて頂いてきた中で、感じていることや考えていることをお話しさせていただきました。学生の皆様に少しでも不登校教育の現場の声が届いていると幸いです。

2 不登校になった理由

文部科学省は不登校の現状を毎年発表している。その中に、「不登校になった要因」についてのアンケート結果をまとめたものが示されている。そして、「生活リズムの乱れ」や「無気力、不安」といったものがその要因の一つとされている。しかし、不登校になる前から生活リズムが乱れ、無気力で不安が強い状態であったのであれば、そうなるための理由があったことも予想される。よって、不登校になった要因(またはきっかけ)は実は本人も保護者もわからない場合が多いように感じる。

一方で、不登校になった要因が明確な場合がある。例えば、「いじめられ」や「学習の躓き」、「環境の変化」などが考えられる。これらの場合はその要因(または困り感)を取り除くことで本人の心の安定が生まれる場合がある。しかし、「取り除き方」は慎重かつ丁寧に行う必要がある。

3 多様な学びの場

学校以外の場所が整備され、様々な施設、団体が特色をもって不登校の子ども達の居場所づくりをしている。このことは、とても意義のあることだと考える。その中であって、私は「学校は必要である」と考えている。私が考える「学校」とは、皆が等しく安全に安心を感じながら学びに専念できる機会のことである。しかし、この「学校」を安全に感じられなかったり、安心できなかったり、不平等を感じた場合にはそこ以外の場所で学びに専念できる場所があってもよいと考えている。要するに、安心や安全、平等というものはそれぞれの人によって異なる場合があるので「学校」以外の場所を学びの場とすることは「アリ」と考えているということだ。私の考える「多様」とはそういうことである。

4 あくまでも休憩場所です

私はフリースクールというものは「休憩場所」だと考えている。不登校という状態になった子ども達は経緯や理由はそれぞれみんな違って、学校に行かなければほとんどの場合自宅で過ごしていることになる。自宅で過ごすことで安心や安全が感じられ、休憩することができるようになればそれはそれで大切なことだと考える。しかし、自宅と同じくらいの安心や安全が感じられる場所を必要とする場合、「フリースクール」という選択肢が生まれる。そう考える

とフリースクールもまた「休憩する場所」と考えることができる。そう、「フリースクールで始まり、フリースクールで終わる」ということを私は前提としていないのだ。人生の一時を過ごす休憩場所に過ぎないと考えている。よって、いつかこの休憩場所から移動するときに来るのだ。そして、その移動するという作業を考えると再度、不安や恐怖が襲ってくる。しかし、次向かう先が今よりももっと安心できる、安全である場所だと思えるとワクワクして移動することができる。それが、学校かもしれないし、社会かもしれないし、他の休憩場所かもしれない。いずれにしてもワクワクするための地図や情報が必要となる。私はその地図や情報を準備し、そっと本人に渡す作業を一旦のゴールと考えている。

5 いじめの考え方

不登校の子ども達の支援を行う中で、「いじめ」について考える機会は少なくない。前述した文部科学省のデータの中にも、「いじめ」については触れられている。どうやら、「いじめ」は解決したことになっている場合が多いように感じる。これは、私がかかわったケースの中にも、学校の先生から「この件は解決していますよ」と言われることがあることから少なくないように感じる。この「いじめ」が要因で不登校状態になった場合であっても「解決したこと」となっているのは少しだけ理解できない。また、「解決したこと」の場合にいじめられの原因が「本人の課題にある」と言わんばかりの言葉を聞くこともある。このことはとても理解しがたい。よって、いじめについて考える際はまず、「本人に課題があること」と「いじめられること」は別のことであるということを理解しなければならない。次に、いじめの解決は加害児童、生徒からの謝罪をもって「解決」ではなく、「いじめられる以前よりも安心できる環境、過ごしやすい環境が整備されている」ということが「解決」の一つの目安だと考えている。不登校の状態の時にその環境を整備することをしていなければ、被害児童、生徒は謝罪を受けたからと言って戻れるものではないと思う。いじめられた者は自分の命を守る手段として不登校という状態を選択できたと私は理解している。その命が存在している間にしか、「解決」に向けた取り組みはできない。そして、「解決」できないのであれば、本人の安全と安心は学校には無いことになり、他の居場所をつくらなければならない。よって、いじめが理由で不登校状態なのであれば、いじめはまだ解決していないというのが私の考えである。

6 論理的な支援

フリースクールを開設した当初(2013年～2015年)は各教育委員会様から「不登校児童生徒が通う民間施設」として認められていなかったこともあるが、「個別の指導計画」を作成して提案しても理解してくれない学校が多かった。そしてその時に言われた言葉は「学校に来てさえくれれば色々できる」という先生方の声だった。あれから10年学校現場は本当に変わった。教育委員会からの認定を受けて以降は担任の先生をはじめ、管理職の先生時には校長先生が先頭に立って、指導・支援の計画立案、情報共有を行うことができるようになった。フリースクールのアセスメント、学校のアセスメントを共有し、本人像をより立体的にとらえることもできるようになった。その結果、9割近くの子が学校を居場所とできるようになった。特に、応用行動分析を行っての計画立案はPDCAサイクルを活用する際にとっても役立った。しかし、このPDCAサイクルでの指導や支援はどうしても時間がかかってしまい、本人の成長(変化)に合わないことも多くタイムラグが発生していた。そこで、最近ではOODAループを使い現在地から

最短で行う有効な支援による効果を目指せるようになった。学校の先生ともリアルタイムの情報共有を行い、先生方の負担にならないように資料作成や分析もフリースクールが行わせていただけのまにになった。「教師の勤」を数字や事柄による裏付けを行い、「事実」とすることで計画の持つ信憑性が増し、チームとなることができるようになってきた。こども達に対する思いとロジカルな考え方が子どもたちの安心につながり始めている。

7 おわりに

フリースクールは今、学校の先生方と同等以上の教育スキルが求められている。面談スキル、指導スキルに始まり、観察力や情報を統合するスキル、伝えるスキル、感じ取る・受け取るスキルなど個人個人のスキルが求められる。今後はそういった人材の育成が必要となってきたと考える。そこで私は、教育に携わる人材の育成に着手することにした。今まで関わってきたこども達、保護者の皆様、学校を始めとする関係機関の皆様と共に学び続けてきたノウハウを次の世代に引き継ぐという新しいステージに進むことにした。

間屋口貴仁（ちゃれきんぐ株式会社フリースクールちゃれすくーる代表）